俳句雑誌

空

2022・12

SORA 104号

空集抄　柴田佐知子抄出

短命とは何歳初蝶がよぎる　苑実耶
靄上げて竹の子山となりにけり　戸栗末廣
あいまいな顔となりゆく藤の下　高倉和子
向日葵を描き平凡に子は育つ　中田みなみ
河豚洗ふ板場修業の子は十五　宮井知英
夜店五百空に鳥居の浮いてをり　吉田葎
反抗期柏餅には手を伸ばす　永淵惠子
柄杓入れ水のかがやく朝ざくら　深川淑枝
糸染むるときの中腰花は葉に　曽根富久恵
足入れて流れの見ゆる春の川　野中みのり
ホルンの音こだまで返る山開き　松田明子

畦塗へ舗装工事の油煙飛ぶ　原友子
あとずさる仔猫に魚のなほ跳ぬる　田中とし江
椅子ひとつ出してひとりの夕端居　石橋幾代
夏近し昨日と違ふ顔洗ふ　井上和子
素魚を呑みたる何となき笑ひ　角野良生
水落つる順に耕す千枚田　星加鷹彦
新緑や塵ひとつなき無人駅　森田明成
街中に水平の風花水木　河原敬子
本音言はぬ夫に幾度も草矢射る　吉田悦子
豌豆を子が剥く飛ばし合ひながら　岩下きぬ代
啓蟄やリードを咥へ犬が来る　えとう樹里
藤棚に憩へば競技場の風　坂口学
空海の食事の時間ほととぎす　山本則男

若夏や足場を伝ふ跣足袋　大西乃子
アルバムに残せぬ写真鳥雲に　押田裕見子
磯遊び八十路の刻はゆつたりと　高畠浩一
トロ箱に子供遊ばせ田草取る　横田敬子
万緑や動ける内に友と会はむ　後藤園子
水盤のさざなみに百合活けをはる　兒玉充代
縁側は老尼の居場所花水木　田岡千章
日の中へ出され蚯蚓の大暴れ　高畑桂
葉桜やドッジボールを腹で受け　中村瑞枝
指さしの始まる赤子百千鳥　荷宮克代
城攻めのごと田水張る方一里　林徹也
朧夜や泣いて笑つてみな逝きし　牧康子
男ゆゑ女ゆゑにと昭和の日　松井順子

植ゑし豆踊るがごとく蔓伸ばす　田中素直
妻の居る何時もの午後や目借時　小島翠波
稲妻や魚が空飛ぶほどの雨　本多トミ
天に矢を放つ修験者風薫る　むつみ蓮
胡麻炒れば菊日和へとはじけ飛ぶ　桝平紗菜江
新緑に取り残されし浪人生　石井みゆき
ペンキ絵のごとき海航く春の船　今井康子
寒明や手の傷一つで不自由に　神田たみ子
涼新た幾度も浸す草木染　伊藤瑞生
棟上げの餅撒きの声夏野まで　倉智万数雄
水滴に青空映す若葉かな　田村正一
舟をこぐ春の日差しを広げつつ　大谷政光
新米やご馳走さまを深々と　亀卦川葵

空集

柴田佐知子選

短命とは何歳初蝶がよぎる　須恵　苑　実耶
帰省の子挨拶よりも夕餉問ふ
蟬の世となれり熊蟬一匹に
法要の間に並べゆく円座かな
並びたる黒酢の菱や雲の峰
無体なりただごきぶりと生まれしに
素麺に飽きて夏休みが終はる
うぐひすや轍そのまま乾きたる　広島　戸栗末廣
かぎろひの中より併返りけり
島の空大きく使ひ鳶の恋

人待ちの白靴ヒマラヤ杉のなか
虫払ひ家紋の茗荷まかり出る
向日葵を描き平凡に子は育つ
籠の蛍朝は放つと約束す
青葉木菟怒りを智慧に変へよとや　糸田　宮井知英
土用干ことに重たき婚の帯
山風に獣の臭ひ夏の果
一束の文を忍ばせ牡丹焚く
河豚洗ふ板場修業の子は十五
河豚刺や青磁の皿に鶴飛んで
夜店五百空に鳥居の浮いてをり　粕屋　吉田　葎
群衆のこゑ昇りゆく揚花火

葱の花終生兄とくらべらる
靄上げて竹の子山となりにけり
友垣や何かと言へばちらし鮓
真うしろの地べたに蛇が落ちし音
あいまいな顔となりゆく藤の下　福岡　高倉和子
鉢巻と弁当配る労働祭
連山の裾をかくして麦熟るる
蝸牛雨に打たれて縮みけり
対岸へ進むほかなく蛇泳ぐ
納戸へと細き廊下や雷遠し
桐の花咲ける青空市場かな　東京　中田みなみ
あめんぼう漱石池の雲に乗る

角伐られ鹿なほ角で闘へり
駆け出せばいよいよ締まる猪の罠
猪括る猪より荒き息を吐き
猪の括られてなほ山を掻く
オール漕ぐぐいぐい若葉引き寄せて　福岡　永淵恵子
ぐづる子がすとんと寝落つ藤の下
反抗期柏餅には手を伸ばす
先生につぎつぎ草矢放ちけり
桜桃忌不埒なことをひとつせむ
河骨のひとつを引けばみな寄り来
青き踏む隠し田ありしこのあたり　北九州　深川淑枝
背山より水引く村や出開帳

柄杓入れ水のかがやく朝ざくら
堰板を押さふる土嚢夏つばめ
夕づつや田植機土をこぼしゆく
藤の花幹の捩れを力とす　直方　曽根富久恵
木蠟の匂ひは甘し春の雨
よろよろと遮断機下るる薄暑かな
糸染むるときの中腰花は葉に
文楽の衣裳も交じる土用干
俎板に黒ずみし傷鳥交る
母の手が背に鞦韆の戻るたび　広島　野中みのり
色かたち歪み魚眼の石鹸玉
足入れて流れの見ゆる春の川
暖かや池に入るごと砂場へと
舗装路を来て校庭の春の泥
ぱんぱんの紙風船に畳み皺
ホルンの音こだまで返る山開き　熊本　松田明子
登山口まづ祓ひたる山開き
顔役の顔揃ひたる山開き
神主も岳人らしき山開き
山祓ひ流れを祓ふ山開き
突風に祝詞ちぎるる山開き
囀や方五寸なる樹木葬　千葉　原　友子
青空のあるしあはせや芽吹山
畦塗へ舗装工事の油煙飛ぶ
薫風や床屋帰りの夫若し
逃げ易き峡の日輪濃山吹
祢宜が掃く間も降りやまぬ夏落葉　岡垣　田中とし江
あとずさる仔猫に魚のなほ跳ぬる
木の芽和小指の先で味見して
鳥の恋止まりし枝を横歩き
菜の花や青空広き古墳群
椅子ひとつ出してひとりの夕端居　直方　石橋幾代
夕空の色となりたるしやぼん玉
鶏の小屋に戻らぬ夏夕べ
しがみつく子猫の爪をそつとはづす
袋菓子配る寺の子花祭
鍵盤の象牙の黄ばみ夕長し　大阪　井上和子
夏近し昨日と違ふ顔洗ふ
陵の濁りし水に真菰の芽
万緑や墳山にまだ不発弾
花水木チエロを抱へてバスを待つ
素魚を呑みたる何となき笑ひ　福岡　角野良生
しばらくは部室に居りぬ卒業子
桜鯛撥ぬる鱗もさくら色
陽炎に溺るるごとく一輛車
波越えし飛魚波に突き刺さる
水落つる順に耕す千枚田　広島　星加鷹彦
ふるさとの言葉に戻り祭笛

背を丸め無口になりて潮干狩
母の日や歳経るごとに恋ふる日日
夏立つや仁淀ブルーの澄みに澄む
新緑や塵ひとつなき無人駅　太軽城　森田明成
雨垂れに跳りつづくる窓若葉
軽暖や家事を促す電子音
道祖神しめ縄重く梅雨に入る
黴の香や倉庫のごとき荒物屋
寝姿は早や少女なり夏来る　北九州　河原敬子
仏壇は児におもしろし柏餅
牡丹の終の一花を供へけり
楠若葉ほむれば苦労話出て

街中に水平の風花水木
神域は樟の闇なり朧月　直方　吉田悦子
どうしても体なじまぬハンモック
泣きやまぬ赤子へ裸子が歌ふ
本音言はぬ夫に幾度も草矢射る
髪洗ふいつしか老いを受け入れて
母の忌や僧に持たする桜餅　直方　岩下きぬ代
武者人形飾れば横に猫侍る
豌豆を子が剥く飛ばし合ひながら
粽解く部屋に笹の香ひろげつつ
菜の花や向う岸へと一輛車
啓蟄やリードを咥へ犬が来る　兵庫　えとう樹里

春の雪子へ額よせ眠りけり
永き日や這ふ子を阻む段ボール
海遠き産土を出ず干鱈裂く
家族より先に新居へ蜂が入る
権現へ轍の深し蝮草　北九州　坂口　学
あめふらし鎌もて払ひ若布刈る
藤棚に憩へば競技場の風
城址は鳥鳴くばかり花曇
けものめく祖父の蓑笠梅雨に入る
黒つぐみ高台に村の駐在所　太宰府　山本則男
空海の食事の時間ほととぎす
畳まれて目玉の残る鯉のぼり

待つといふことを知りをり燕の子
桃咲いて緩和病棟といふ別れ　兵庫　大西乃子
若夏や足場を伝ふ跣足袋
豆ご飯テレビは戦禍流しをり
夕焼や沈みしままの旅客船
山裾にまだ色のなき初桜　北海道　押田裕見子
千本の空へとふぶく桜かな
アルバムに残せぬ写真鳥雲に
銭湯のゆの字の暖簾夏に入る
太々と走り根絡む木下闇　北九州　高畠浩一
今日もまたつちふる中の落暉かな
磯遊び八十路の刻はゆつたりと